



東日本大震災大津波から8ヶ月を過ぎて

陸前高田市立小友中学校

校長 加藤 清

1 震災の様子

平成23年3月11日（金）午後2時46分、何の前触れもなければ何の準備もしていない無防備のなかで、私たちは観測史上最大であるマグニチュード9の大地震、その後押し寄せた10数メートルの大津波の襲来を受けた。

小友地区は、広田半島の付け根にあたり、市内一の水田地帯。津波は太平洋側と広田湾側から水田を襲い、634戸中247戸（39%余り）が全半壊、風光明媚な小友浦干拓地は一面瓦礫の海と化した。死者・行方不明者は市内全域で2,000人を超える大惨事となった。

翌日に控えた卒業式の準備作業を終えようとしたところ、経験したことのない大きな横揺れが起きた。数分後、校庭への避難指示により、教職員と生徒が避難した。大津波は校舎の2階まで達し、校庭には新たな水溜まりが生じていた。携帯ラジオによる情報収集ができずカーラジオで速報を聞く。余震が続く中、隣接する小学校へ移動し、児童らと合流して間もなく、太平洋側（約3km）から黒い土煙を上げた津波の第1波が襲来するのが見えた。校門から旧国道を横切り高台の山林に避難した。小雪が降る中、寒さと恐怖に震えながら、より高台にある上の坊公民館へと移動した。学校を振り返ると、体育館脇に停めていた自家用車が波に揉まれ漂って行った。

電気・水道が途絶え、電話（ケータイ）も不通となり、道路も寸断され、まったくの孤立状態に陥った。18時過ぎ、海水とがれきに埋もれた校舎内に立ち入り、被害状況を調査したところ、校舎の大規模な破壊崩落はないものの、一階天井がずり落ち、ガラスが散乱。無数の流木、自動車や漁具、金属片や家財道具類などが校舎出入り口を埋め尽くす光景であった。大津波が一瞬にしてすべてを変えた。地区住民からの炊き出しの差し入れ、自家発電機による送電により、寒さと不安感の中、身を寄せ合って50名余りが一夜を過ごした。公民館に避難後、自力で帰宅できる職員は、家族の安否確認のための一時帰宅を許可する。

翌日から、生徒たちの安否確認を行い、職員で手分けして家庭訪問を行うが、通信手段がない中、徒歩移動による状況把握に手間取る。平行して卒業式・修了式の持ち方、高校入学事務手続き、新年度に向けた準備作業を進めようとするものの、市教育

委員会、複数の県立高校などが被災し、連絡・移動手段もなく、蓄積してきたパソコンデータが流失するなど、さまざまな問題が生じた。

震災10日目、行方不明だった生徒と安置所で対面する。ビニル袋に包まれた生徒4名の亡骸を拝む。ただ拝む。合掌の手が震える中、祈りを捧げる。火葬への出立を見送る。まだ不明の生徒宅を訪問し、叶わぬとは知りながら、一縷の望みを家族と共有する。12日目、最後の不明者の消息がつかめる。合掌！無念だ！

職員打ち合わせで、ご遺族への対応策を協議し、生花等の手配をする。

一方、小友町対策本部会議へ参加し、地区民に対する学校からの情報や要望などを随時行い、保護者・地域との連携を図った。

2 学校再開に向けて

中学校校舎での再開が難しいと判断し、小学校を間借りする方向で市教委・小学校への協力要請、保護者への理解を求めていく。地域自衛消防団や社会福祉協議会へ支援を要請し、学校再開に向け、ライフラインの復旧の進捗状況を見据えながら、校地内の瓦礫撤去、校舎内のヘドロの除去・消毒、通学路の確保等の準備作業を手分けして行っていった。また、支援にきた医療チームの巡回訪問時に、職員の健康診断を実施していただくとともに第一中学校内に設置された「心のケアチーム」を講師に招聘しての職員向け研修会を実施し、援助者としてのかかわり方を学ぶ。電気が不通のため、パソコンをはじめとするすべての機械が使用できず、耐火書庫に収納していた公簿以外の学校関係書類が流失してしまい、その復元作業にもものすごいエネルギーを要した。

このような状況の中、4月2日、モビリア避難所にいる地元民の紹介で柿本先生ら6名の支援隊の皆様方が上の坊公民館を訪問された。あの美しい三陸の地をご自身の目で確かめられ、大和市への帰りの燃料用にと持参なさった携行缶ガソリンを頂戴しました。「また来週末です。」と話された。嬉しかった。震災以来、何にもまして力づけられたのは、Ed.ベンチャーからの支援活動であり、避難生活をしてる子供たちへの温かいかわり方でした。

他の支援団体と大きく異なる点は、現地のニーズにマッチした支援活動を継続的に展開してくれたことです。刻々と変化する課題を適切に把握し、スピーディーにニーズを応じてピンポイントの対応をしてくれた。不足していた物資は、パソコンやプリンターなどのOA機器と保健室関連のもので、どこからも提供されにくい学校特有の物資で、一般の支援先では調達が困難なものばかりだった。

電気・水道、通信手段の復旧に連動しながら、新年度に必要な教具や教材の手配（支援先の発掘・調達）、学校再開に向けた間借り教室の整備、臨時職員室の設置など、小学校からの協力による整備を行い、小学校から二日遅れで始業式を迎えた。

特に困難を極めたのが、ヘドロに埋め尽くされた教室や体育館の清掃用の水の調達であった。飲料用として配給されるペットボトルや給水車の水を使用するわけにもいかず大変であった。生徒を受け入れるための衛生環境の点検消毒は、保健所や学校薬剤師の助言を受け、主に養護教諭が担った。150名余りの児童生徒・教職員が仮設トイレ2個では、対処できないことから、市教委に増やしてくれるよう要請したところ、受注が追いつかず、簡易トイレで用便することを余儀なくされる。アルミの支柱にビニル製のテントを張り巡らせた簡便なもので、国道などの主要道路の復旧は進められたものの、通学路の安全確保が進まず、自衛隊、地域住民ボランティアによって、がれきの撤去が担われた。校舎の安全性については、市教委の要請による建築専門家が目視での安全点検を行った。

3 学校機能の回復に向けて

本中学校長会の主導による、支援策の一つに学校間支援がある。内陸部と被災地の学校が継続的な連携をとり、物資や金銭面で支援を行っている。本校には、隣接する一関市の姉妹校支援として花泉中学校が入学式終了後に特設合唱部による演奏会やPTAによる「祝い餅」が振舞われ、両校の交流がスタートとなった。

生徒の家庭状況の把握と通常の学習活動を展開するための教材教具の欠乏が大きな関心事となった。毎時間の授業を進めるうえで、理科室や技術室、校庭や体育館での授業ができない状況で、臨時時間割を編成し日替わりに授業を組み替えながらの変則的な対応をとらざるをえなかった。また、小学校の生活時程との調整を図りながら、原則ノーチャイム制をとり、業間休みや昼清掃など、小学生の生活リズムの確立を基本にした運営をすることにした。

朝の会から各教科の授業、帰りの会、そして放課後の諸活動（部活動）が繰り返し行われることで、生徒の安定感や安心感が醸成されると考え、毎日の生活リズムの確立を最重要視した教育課程の実施に努めた。

例年5月中旬に実施する「運動会」は、保護者や地域からも後押しされ、実施を躊躇する学校が多い中、学校再生の気運を高める機会となった。大津波による犠牲となった仲間への思いが重なり、勝っても負けても笑顔があふれる楽しい運動会だった。全校生徒が全国からの「がんばれ高田」の声援に押しつぶされそうになる気持ちを「がんばったね」という評価を受け、「地域の大人を元気づけ、励ます。」ことを実感でき、生徒たちのこれからの行動目標とすることができた。

また、部活動で使用する道具や用具類の調達の問題、活動時間や活動場所を確保するため奔走する教職員が1月後に控えた地区中総体に向け、生徒の健康状況や心身の疲労度を把握しながら、土・日返上で付き切りの指導を進めてくれた。内陸部の中学校からは休日の合同練習や練習試合への招聘、父母会による昼食の炊き出しなど物心両面にわたる交流や支援を勢力的に行ってくれた。休日に活動しない文化部の生徒たちがモビリアの避難所でバイ・ミーの学生さんと遊んだり、ゲームや学習を教えてもらったりしながら楽しく過ごすことができ心を支えてくれた。本当に感謝しています。

4 これから

あの震災から8ヶ月あまり経過した。今、小友の町と学校は、全国から寄せられた善意と激励に支えられながら、多くの難問を抱えながらも復旧・復興の道を歩んでいる。支援をしていただいたEd.ベンチャーの方々、趣旨に賛同いただいた多くの方々に、重ねて心からの感謝とお礼を申し上げます。

震災を通して得たものや新たな人とのご縁を大切に、様々な課題を一つ一つ明らかにし、その解決に向けた努力していきます。ややもすると支援活動を受けるのに慣れっこに陥り、依頼心・依存心が増す心配もあったのですが、行政が手をださない分野での物的な支援を継続して行って下さったことで、ここまで復旧することができました。

今後取り組むべきことは防災教育です。自分の命は自分で守る。そして、物の大切さと家族や仲間、人との絆の大切さを基本にした「生き方教育」を推進していきます。そして、地域の復興の担い手を育成するという崇高な使命感を胸に、教職員と手を取り合いながら歩んでまいります。復興までの長い道のりが予想されます。今後ともご支援、励ましをよろしくお願いいたします。

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

